

習志野市の市史編纂は、長い時間をかけて発展してきた重要な事業です。

1. 市史編纂の始まり

習志野市の歴史を記録し、市民に伝える取り組みは、昭和 50 年代から本格的に始まりました。

市民の多くが戦後の転入者であることを踏まえ、地域の過去を知る機会を提供することが求められていました。

昭和 51 年には市企画調整室広報課において市史編纂のための資料収集が開始され、昭和 55 年には教育委員会文化課市史編纂係として再発足し、昭和 57 年度からは、基本構想を定めるための市史編纂委員会、実務機関としての市史編集委員会が設置されました。

2. 「わたしたちの郷土 習志野」(昭和 54 年)の刊行

昭和 54 年(1979 年)、市民に郷土の歴史を理解してもらうために『わたしたちの郷土 習志野』が発刊されました。

この冊子は、戦後の都市発展や住民構造の変化を背景に、習志野市の歴史をわかりやすくまとめたもので、市民の郷土理解を深めることを目的としていました。

3. 「習志野市史」編纂事業(平成 2 年～平成 7 年)

昭和 57 年度から市史編纂委員会と編集委員会では、市内外の史料収集が積極的に行われました。

平成 2 年（1990 年）から平成 7 年（1995 年）にかけて、市の歴史をより体系的に記録するための「習志野市史」編纂活動が推進されました。

習志野市史編纂事業の目的と基本計画（歴史的特色）

本市域一帯は、古くは東京湾の奥底に位置して、波静かな入江のたたずまいに原始的な生活が営まれ、貝塚・古墳などの遺跡が残されている。

また、中世には鎌倉幕府成立の前夜、源頼朝の挙兵に際し、鷺沼の館が頼朝傘下の武士団の拠点になったといわれ、さらに頼朝を支持して下総国守護となった千葉氏一族の勢力下にあった。

近世に入り、徳川家康の関東入国以後は、歴代将軍の鷹狩りで名高い東金街道の一角を占め、また江戸を後背地とする内湾漁業のいとなみがみられ、幕府直営の馬牧の地として栄えるなど、徳川幕府の諸政策は直ちに本市域に重要な関係と影響を及ぼしながら発展してきた。

近代の習志野市は、軍都としての性格が著しく、また民間航空技術者養成の場としての動きもあって、日本の近代国家としての急速な発展過程においても重要な一翼をになう地域でもあった。

戦後は首都圏の一角を占める新興都市として人口の目ざましい急増現象がみられ、文化都市、教育都市、港湾都市として、ユニークな新都市の建設に邁進している現状である。

このような歴史の流れにあって、昭和 45 年、市民の総意のもとに、人間性豊かなまちづくりを指標とする「文教生宅都市憲章」を掲げた本市は、その市史編纂事業においても、本市の歴史的発展過程を明らかにすることにより、市民の郷土理解と愛郷心を深め、本市の発展と文化の向上に資することを主要目的としました。

この期間中に、歴史資料の収集・整理・調査が行われ、古文書解説講座や市史研究会の活動を通じて市民との交流が深められました。

4. 「習志野 その今と昔」(平成 2 年版) への継承

平成 2 年には、『わたしたちの郷土 習志野』の内容を発展させた『習志野 その今と昔』が刊行されました。

この書籍は、市民が郷土の歴史に親しみを持てるように、より詳細な歴史資料とともにまとめられています。

戦後の急速な都市化の背景や、地域の成り立ちを多角的に描き、市民の歴史的理解をさらに深めるを目的を担いました。

5. 「習志野市史」の刊行とその後

平成7年には『習志野市史 通史編』が刊行され、市の歴史を年代順に詳しく記述し、習志野の歴史概説書となりました。

これにより、市史編纂事業は一応の完結を迎えましたが、その後も市民の関心を高めるために『習志野 その今と昔』の改訂版（平成16年）、「習志野市史 民俗編」が発行されるなど、継続的な取り組みが続けられました。

このように、習志野市の市史編纂は昭和から平成にかけて断続的に進められ、地域の歴史を広く市民に伝えるための重要な取り組みとしての発展・経過が確認されます。

市民の協力と関心を集めながら、郷土史研究の機運を高めてきたのです。

新版『習志野 その今と昔』（平成16年版）の改訂作業にあたり、以下の点に注意すると、より精度の高い市史が完成するでしょう。

1. 平成時代の叙述の追加

令和時代に入り、平成の出来事を体系的に整理し、習志野市の変化や社会情勢を反映することが重要です。特に以下の点を考慮するとよいでしょう。

-人口動態の変化：平成時代の習志野市の人口推移や都市開発の進展。

-行政・政策の変化：市政の重要な決定や主要な施策の影響。

-産業・経済の発展：平成時代における経済構造の変化や新しい産業の発展。

-文化・教育の発展：市民の教育環境や文化振興に関する記述の充実。

2. 研究活動による史実の解説

歴史事象の再評価を行い、最新の研究成果を反映することが求められます。以下の点に注意するとよいでしょう。

-新たに発掘・解明された歴史的資料の活用：未解明だった歴史事象の新たな解釈を加える。

-考古学的研究の成果：習志野市域における遺跡や文献の新発見の整理。

-過去の記述の見直し：誤解や不足のある記述を修正し、正確な情報を提供する。

3. 歴史事象の評価と監修のチェック

改訂にあたっては、以下の監修のポイントを意識するとより信頼性の高い内容となります。

-学識経験者による監修：習志野市史に詳しい専門家の意見を反映する。

-市民の声の反映：市史編纂に市民が関与できるよう、アンケートや公聴会を活用する。

-過去の記述との整合性：既刊の市史と矛盾しないように調整し、継続性を持たせる。

4. 市史の構成と編集方針

新版改訂では、以下の点も考慮し、読みやすさと親しみやすさを確保しましょう。

-分かりやすい表現の採用：専門用語をできるだけ平易にし、幅広い市民に理解されるよう工夫。

-視覚資料の充実：写真や図表を活用し、歴史の流れを直感的に理解しやすくする。

-デジタル活用の検討：紙媒体だけでなく、ウェブや電子書籍化を検討し、アクセス性を向上させる。

これらの視点を考慮しながら改訂作業を進めることで、より充実した習志野市の歴史書として、多くの市民にとって価値ある資料となるでしょう。改訂作業が成功することを願っています！

最後に、真摯に進められてきた郷土の歴史・遺物の発掘、記録・文献、いわゆる歴史資料等が、つぶさに市民の現前に示される「郷土資料・博物館」施設の設置を期待したい。